

平成三十年度 中古文学会春季大会シンポジウム企画・研究発表要旨

第一日 五月二十六日(土)

シンポジウム「これからの中古文学研究のために」

去る二〇一六年秋、中古文学会は創立五〇周年を迎え、次いで機関誌『中古文学』も二〇一七年秋に創刊一〇〇号を迎えた。もとよりそれらは慶賀すべきことであるに違いないが、一方で、中古文学研究を含む人文科学を取り巻く厳しい環境がいよいよ深刻さを増しつつあること、学界の側がそれに抗うための有効な手立てを講じられていないことも、また否定しがたい事実としてある。

加えて、この半世紀の間に、中古文学の分野でも研究の細分化と自閉化が急速に進み、巨視的な視座を確保することは容易ではなくなっている。研究対象としているジャンルや作品が異なれば、あるいは同じ作品を扱っていても研究方法が異なれば、学的な対話さえおぼつかない、というケースも珍しくない。そうした状況のもとでは、広く学界の内外に中古文学とその研究の面白さを伝え、会員の漸減傾向が続く中古文学会を今後五〇年、一〇〇年と存続させてゆくことは不可能に等しかろう。

本企画は、上記のような危機感を踏まえ、若手・中堅の気鋭の研究者をパネリストとして、これからの中古文学研究のために何が必要なのかを問い、各々の問題意識に即して直截に論じようとするものである。ジャンル、時代、国境等々のさまざまな壁を越えて、中古文学の持つ普遍性を見据え、その魅力を語ること——。これこそが、中古文学とその研究を持続可能なものとして未来へと残してゆくための鍵となるであろう。

本大会では、以下の二つのミニシンポジウムを行う。

「コーディネーター」

◎桜井 宏徳(成蹊大学「非」・國學院大学「兼」)

ミニシンポジウム1「韻文と散文、和と漢の交通」

和歌・漢詩などの韻文の研究者と、物語・日記などの散文の研究者と、研究対象および研究方法の相違に由来するディスコミュニケーションが常態化して久しい。中古文学において、散文のテクストが韻文を深く抱え込んでいることは論を俟たず、研究の進展には双方の研究者の連携が不可欠である。それにもかかわらず、各々の関心の違いや、所属するコミュニケーション同士の交流の薄さなどに阻まれて、いまだにこのディスコミュニケーションは克服されるに至っていない。

ミニシンポジウム1では、和歌と物語・日記、あるいは和文と漢文といったジャンルの垣根にとらわれず、幅広く柔軟な研究を展開している三名のパネリストが、既存のジャンルの枠組みを乗り越えて中古文学の何たるかをより巨視的に捉えるための方法について、これまでの実践的な取り組みも踏まえつつ論じあう。

「司会」

◎久富木原玲(愛知県立大学)

「パネリスト」

◎古田 正幸(宮城学院女子大学)

◎諸井 彩子(聖徳大学)

◎西野入篤男(桐朋女子高等学校音楽科)

ミニシンポジウム2「時空を越える中古文学——その普遍性を探る——」
中世・近世における擬古物語の創作や、『古今和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』などの注釈の盛行、近現代の日本や海外における『源氏物語』をはじめとする中古文学の現代語訳や翻訳・翻案——。こ

うした現象は、時空を越えて読み継がれ、変容しながらも不断に再生し続ける中古文学の持つ普遍性を考える上で、貴重な示唆を与えてくれる。そしてそのことは、私たちが教室で、学会で、あるいはその他の場で、中古文学とそれを研究することの愉しさ、面白さを伝えようとする際にも、大きなヒントになるはずである。

ミニシンポジウム2では、中世王朝物語と『源氏物語』古注釈、王朝物語と近現代文学、一九世紀西欧における中古文学の受容と、各々の関心に即して中古文学の持つ普遍性を追究してきた三名のパネリストが、中古文学とは何か、中古文学を研究することの現代的意味とは何かについて論じあう。

【司会】

◎須藤 圭 (筑紫女学園大学)

【パネリスト】

◎小川 陽子 (岐阜大学)

◎伊藤 禎子 (学習院高等科)

◎常田 槇子 (早稲田大学)

第二日 五月二十七日(日)

渤海国王大嵩璘からの「王啓」・「告喪啓」と敦煌書儀との関係

早稲田大学「院」 川村 卓也

延暦十四年(七九五)十一月三日に提出された出羽国からの言上『類聚国史』巻一九三殊俗「渤海上」(収載)によると、渤海国王の大嵩璘が遣わした使者、呂定琳ら六十八人が夷地志理波村に漂着した。その後、呂定琳らは、越後国において供給を受けたのち、翌年帰国した。

本発表で取り上げるのは、延暦十五年四月に呂定琳が日本側に伝えた、渤海国の国王大嵩璘からの「王啓」・「告喪啓」である。両書簡には、新国王としての嵩璘からの挨拶と、先王である大欽茂を亡くした悲しみの気持ちとが述べられている。

さて、両書簡を読み解くにあたり、問題となるのが、欽茂・嵩璘の関係である。「告喪啓」での「孤孫」という表現を拠る所にして、石井正敏氏をはじめとする先行研究の多くは、欽茂・嵩璘の関係を、祖父・孫の関係とする。本発表では、両書簡の文面の多くが敦煌書儀における、父親が死去した際の書簡の規定に沿っていることを指摘し、新訂増補国史大系本における本文校訂に疑義を呈したい。その上で、欽茂・嵩璘を祖父・孫の関係としていた先行研究に再考を促したい。

また、両書簡については、「桓武天皇御書」『類聚国史』巻一九三延暦十五年五月丁未条)では、「首尾不悋、既違旧儀…(首尾悋れあらず、既に旧儀に違ふ…)」としている。両書簡の表現を具に読み解くことによって、いかなる点が日本側の勘気を蒙ったのかについて検討し、両書簡の日渤外交文書における位置づけを考えたい。

一条朝の儒者大江匡衡は、家集『匡衡集』を遺し、中古歌仙三六人伝にも載る和漢兼作の文人であった。匡衡の妻赤染衛門もまた、同時代の藤原公任や紫式部にその実力を認められた歌人であり自撰の家集『赤染衛門集』を遺している。

匡衡と赤染衛門が結婚に至るまでの和歌のやりとりは、両家集によつて見ることができ、両者の贈答歌には漢故事の使用など漢詩文を受容して詠まれているものがある。ただし、匡衡は必ずしも和歌の詠作に漢詩文を積極的に利用しようとはせず、従来の和歌の修辭の範囲で詠んでいるにもかかわらず、赤染衛門は匡衡の歌の中に漢故事や漢詩文の修辭を見いだして返歌をする傾向がある。返歌をする側が贈答の言葉を用いながらもそれを意外な方向に発展させ切り返すのは、贈答歌の定石ともいうべきことではあるが、赤染衛門の場合は、従来の和歌ではあまり見られない漢故事や漢詩文を利用して、返歌のところに特徴がある。

本発表は、大江匡衡と赤染衛門の贈答歌から、特に赤染衛門歌の漢詩文受容について検討し、一条朝の女性の漢詩文受容について考察するものである。

『うつほ物語』（以下『うつほ』と呼ぶ）には、重複歌を除くと九八五首の和歌が収められている。そのうち「風をいたみ露だにおかぬ小松には宮人涼む陰やなからん」（吹上下・涼）や「夜を寒み羽も隠さぬ大鳥のふりにし霜の消えずもあるかな」（内侍のかみ・忠康）など、いわゆるミ語法を用いた歌は計三七首を数える。『源氏物語』の所載歌七九五首中、ミ語法詠は計一首であることを鑑みると、『うつほ』のミ語法の多さは注目に値しよう。

ミ語法は上代において隆盛を極め、中古以降は衰退形骸化したとされるが、和歌用例を精査してみると、後撰集時代の和歌からは多数のミ語法詠が見出される。中でも、梨壺の五人のメンバーでもあった源順・清原元輔・大中臣能宣の歌作や曾禰好忠らの初期定数歌に用例が集中している感がある。『うつほ』の和歌については、つとに順・好忠ほかその周縁の歌人詠から新たな表現を摂取していた可能性が指摘されている。『うつほ』におけるミ語法詠の多さは、そうした傾向と軌を一にするものといえそうである。事実、『うつほ』のミ語法詠には、「根を深み」「色深み」「山しげみ」のように後撰時代から詠まれ始めたと思しい表現が少なからず見出される。その一方、万葉歌からの摂取や『うつほ』作者の創作かと疑われるようなミ語法句も散見される。『うつほ』歌と後撰時代の和歌は、ミ語法に対するアプローチの手法が極めて近いとみてよいのではなからうか。

『伊勢物語』の解釈と挿絵

—住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」を中心として—

大阪府立大学 青木 賜鶴子

『伊勢物語』は早くから絵と共に鑑賞されたいが、残念ながら現存最古の伊勢物語絵は鎌倉時代の断簡であり、全章段の詞書を見える完本としては室町時代後期の大英図書館本「伊勢物語図会」、小野家本「伊勢物語絵巻」が最も古いと考えられる。

今回考察の中心とする東京国立博物館所蔵の住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」は、全章段の詞書と八〇場面の絵を具える六巻の絵巻で、小野家本の絵が四六場面（大英図書館本は欠落があり四五場面）、嵯峨本が四九場面であるのに比べて格段に多い。

詞は左中将愛宕通福（一六三四〜九九）、絵は住吉如慶（一五九八〜一六七〇）の筆で、如慶が住吉を名乗った寛文三年（一六六三）以降の作と推測される。また『寛政重修諸家譜』によれば、徳川家網の正室高蔵院遺愛の品で津軽家に下賜されたことがわかり、詞書筆者・絵師・伝来が明らかな点で貴重である。

本絵巻は、『伊勢物語絵巻絵本大成』（角川学芸出版、二〇〇七年）や展覧会図録等に一部が紹介され、美術史の立場からの論考はあるが、絵の背景にある伊勢物語理解については、いまだ十分には明らかにされていないように思われる。そこで、本絵巻を中心に、『伊勢物語』の解釈と挿絵の問題について考えてみたいと思う。

『浜松中納言物語』にみる歌謡引用

—童謡としての物語表現—

立正大学 山田 貴文

「童謡」は、もともと『春秋左氏伝』を初めとして中国史書で政治的風刺の要素を持つ歌として児童の間で流行した歌を指す。日本においては、民衆の間で流行し、政治風刺というよりは、事件が起こる前兆とされるものを指して「童謡」または、「謡歌」と記しワザウタと訓じている。これは、『日本書紀』古訓に依るが『新撰字鏡』や『類従名義抄』でもワザウタとして訓じている。「童謡」、「謡歌」と表記される歌は、『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本三代実録』に記載される。

「童謡」研究は、一九八〇年代の「記紀歌謡」研究を初めとして、上代文学の中で展開されている。

この「童謡」は、先述の文献にのみ記載されるが、「童謡」として記載されていない歌が、歌として「童謡」の性格を纏っていないとは言えないと考える。

上代で形成された「童謡」という歌謡が纏う性格は、中古物語作品においても歌謡の記載表現として物語表現の中に利用され、歌を「童謡」として登場させ、登場させることで物語の展開を誘導し、読み手に対して歌から物語を予想させ、そこに歌う人物の属性を設定させていると考える。

本発表では、中古物語作品である『浜松中納言物語』における歌謡引用記述部分より引用歌謡を「童謡」として読むことで、物語表現として歌謡引用がどのような効果を物語へ与えているかを明らかにしたい。

『源氏物語』に語られる恋愛譚では、男君による仲介役―多くは女君の侍女―の見定めから接触、語らい、懐柔などのやりとりを通して、女君に対する抑えきれない男君の心の内が読者に示される。そうした男君と仲介役との攻防は、男君の欲望を内側から暴いてゆく語りの方法である。

恋愛譚における仲介役として、空蟬物語の小君は特殊な存在である。なぜなら、小君は「故衛門督の末の子」「中納言の子」と語り出されるように「子」としての属性が強調されているからである。つまり、男性従者でも侍女でもましてや伺候者ではないのである。男性でありながら、侍女のような役まわりを、光源氏にそして物語に与えられた小君は、男性従者と侍女の「あわい」の存在と言えよう。なぜ、物語は二人の逢瀬から侍女を排除して小君を仲介役に語るのだろうか。二度目の逢瀬を願う光源氏と小君との対話は、読者に何を示そうとしているのか。

小君をめぐる問題としては、「光源氏の男色」「継子譚からの救済者」「童という男女の境界的、両性具有」「権力的関係」などが先行研究として指摘されてきた。本発表では、関屋巻において光源氏の従者の一員となった小君が、どのようなことば、語りによって男性従者として物語に組み込まれていったのかを明らかにすることで、伺候者論の可能性を示したい。

藤壺宮と紫上は、死後、優れた生き方や人格が称讃され、世の中のあらゆる人がその死を嘆き悲しんでいると語られる。新全集頭注は、これらの語りを「型どおりの、故人の頌徳と哀悼の章」「国史の墓卒伝を思わせる文体」とする。たしかに二人の死後の語りは官人墓卒伝の構造と近く、従来、とくに藤壺宮について、その死を公人の死として描き、歴史上の后たちと異なる人物像を示そうとする作者の意図が指摘されてきた。だが『源氏物語』は、彼女達が公人だったこと、歴史上特筆すべき人物像だったことをその死後に語りたかったのだろうか。官人墓卒伝という視点だけでは、語りの意図は見えてこないと考える。

そこで注目したいのが、これらの語りに誄やその系譜にある人麻呂殯宮挽歌の影響を見る論である。誄とは古代中国から存在する、死者の生前の行跡を表し、残された者の悲しみを述べるといふ一定の型を持つ文章である。その誄の型を用いることで、『源氏物語』の語り手は残された者の悲しみを描く物語を展開してゆくといえるのである。

本発表では、中国の誄が日本でいかに変容していったかという文学史の流れをおさえたうえで、とくに人麻呂殯宮挽歌の語りのありように注目し、誄の型が『源氏物語』の藤壺宮や紫上の死後の語りとどのように繋がり、物語内で機能しているのかについて考えることにしたい。

『源氏物語』 頭中将の参議補任

大宮開成中学・高等学校「非」 藤本 千織

京との連絡が途絶えがちになる中、須磨に謫居する光源氏のもとを頭中将が訪れた。この記事は両者の熱い友情を象徴する場面と見られるが通説だが、実際にはそれ以上の意味が読み取れるものと思われる。

見逃せないのは、その際に頭中将が三位中将から宰相中将になつていた官途のありようであろう。平安前期から中期に限つてみれば、三位中将から宰相中将へと進む官途は必ずしも理想的とは言えない。望ましいのは、参議を経ないで中納言や権中納言に進む事例であり、頭中将のごとき経路は二番手に属するのである。嫡出でない撰関家の子弟や、撰関家の傍系、あるいは不運にも時流から外れたといったような負の要因を抱えた者がこの種の昇進にあずかる。これは撰関家嫡流の設定と見られる左大臣家の世子としては、むしろ不本意な官途だつたと言えるだろう。

もとより、頭中将は賢木巻において昇進を見送られた経緯があつた。今回はその時に見送られた昇進が改めてかなえられたのかと見せかける文脈であるわけだが、実はそうではないのではないか。つまり、賢木巻で得られるはずだつた栄達よりも、一格低い形の昇進に留められたというのが、この参議補任の真相ではなかつたかと思われるのである。そのことからすれば、この人物の須磨訪問の動機も友情一辺倒で押さえるわけにはゆかないであろう。物語の文脈の下に隠された右大臣家と頭中将との駆け引きや暗闘をその人事の背後に読み取つてみたい。

夕顔の袴の下紐

— 『源氏物語』 「夕顔」巻における四十九日の法要をめぐって —

フェリス女学院大学 竹内 正彦

急死した夕顔の四十九日、光源氏は「装束」をはじめとした布施のものを用意して誦経をさせる。夕顔の名を伏せたまま光源氏が書いた願文の草案は、文章博士も手を加えるところがないものであつたという。夕顔の四十九日の法要は、光源氏の手によって、「忍びて」、しかも「事そがず」行われたのであつた。

この時、光源氏は「忍びて調ぜさせたまへりける装束の袴」をとり寄せ、「泣く泣くも今日はわが結ふ下紐をいづれの世にかとけて見るべき」との歌を詠んでいる。四十九日には故人の調度や衣装を寺に寄進することがあり、夕顔の場合、それらが手元にないたため、光源氏によつて「袴」を含めた「装束」が新調されたと解されている。本発表では、ここでその「袴」を手にながら歌を詠む光源氏のふるまいに注目したい。この「袴」は布施のためのものとはいえず、亡き夕顔が身につけることが念頭におかれていよう。光源氏の歌の背景には『萬葉集』に見られる男女が下紐を結び交わす習俗が指摘されているが、四十九日の法要で詠まれる歌であることを考慮すると、そこには夕顔の鎮魂はもとより、正体を隠したまま死んだ夕顔を据え直そうとする意義をも読みとることができるのではなからうか。

本発表では、たんなる装束に留まらない「袴」の文化的意義をおさえたい。それを引き寄せて歌を詠む光源氏の姿を見つめ直し、死後、四十九日をむかえた夕顔のあり方について考えてみたい。